

第五回 日ソ円卓会議 第二分科会サブ・レポート

# ゴルバチョフ現実主義外交と

## 日本の立場



中嶋嶺雄

東外大教授

私は、一九八四年一〇月にモスクワで開かれた第四回日ソ円卓会議に出席した際、日ソ間の政治・外交問題を軸とした第二分科において、鳩山威一郎元外相の格調の高い基調演説のあとで、「東アジアの新しい国際環境と日ソ関係」と題する報告と発言をおこなった。

そのとき私は次のように述べてソ連の外交姿勢の転換を迫ったつもりである。「これから二十一世紀にかけてはまさに東アジア、西太平洋地域(WPR)の時代である。最近のように日ソ関係が悪化を続け、ソ連が従来の立場を転換しようとしなければ、日ソを中心とする北太平洋地域は南方のアジア太平洋地域の経済的繁栄からおきざりにされる結果になるだろう」

さらに私は続けた。「我々は新たなアジア太平洋地域構想をうち出していくことが重要である。特に日本とアジアNICs(台湾・韓国・香港・シンガポール)を含む西太平洋地域での経済的活況は、太平洋沿岸に重点があると主張しているアメリカにとっても、重要

な意味をもつ。このような太平洋共同体を新たな冷戦の場にしてはならない。

こうした状況の中で、アジア地域の緊張緩和は、日ソ両国にとつて、共通の現実的課題である。この点では、イデオロギーにとらわれない、新たな協力関係を多面的につかむことが火急の要請であり、そのことが領土問題を含みきわめて困難な日ソ関係の打開につながるものと確信する」

しかしこうした私の意見に対し、当時のソ連側は全面的に同調するという立場ではなかった。それは当時のソ連が依然として新冷戦的な状況認識に立っていたことを示している。

ところがゴルバチョフ新体制下のソ連は、従来のブレジネフ型世界戦略からの転換を大きくはかりつつあり、一種のグローバルリズムの立場から、日本を中心とするアジア太平洋地域の経済的活力にたいして、大きな注目を寄せつつある。とくに一九八六年七月二十八

中嶋嶺雄

日のウラジオストックにおけるゴルバチョフ書記長の演説は、大げさにいうなら、右の日ソ円卓会議における私の提案を、ゴルバチョフが受け入れたとも思われるトーンで、アジア太平洋時代へのソ連の積極的なアプローチを表明したものであった。ここにもゴルバチョフ現実主義外交のニュー・アプローチの一端が示されているといえよう。

そうした意味でもウラジオストック演説は注目されたが、それがウラジオストックという極東ソ連の太平洋沿岸都市で中国や日本などアジア諸国を目的にしているという効果もさることながら、次の点でゴルバチョフ新外交の特色を物語っていた。まず第一に、その内容がきわめて包括的かつ具体的で、従来のソ連首脳が政治宣伝的なこの種のスピーチとは、まったく性質の異なったものであった。

第二に、ゴルバチョフ演説は、七〇年代末以来の「新冷戦の時代」の一方の当事者であり、その責任を負っていたソ連が、みずからの忌まわしい過去を清算しようとしていることを明白に物語っていることであろう。

そして第三には、アフガニスタンからの六個連隊の帰還、モンゴル駐留ソ連軍の相当部分の撤収、中国との地上兵力相互削減交渉の用意など、軍事戦略上もきわめて重要な諸措置について、ソ連が近い将来の自己の行動計画を公開の場で一方的に約束したことである。このようなことは、将来のソ連外交には見られないことである。ここにも、現実主義的なゴルバチョフ新外交の並々ならぬ意欲が感じられるといえようが、それ以上にゴルバチョフ書記長は、ブレジネフ旧外交のマイナス遺産から解放されようと思死になつて

いると読むこともできよう。

こうし印象を私は得たのであるが、ウラジオストック演説は、アジア・太平洋地域のほぼ全域にわたっているので、ここではとくに中ソ関係と日ソ関係にしばって、問題点を掘り下げてみたい。

まず中ソ関係についてであるが、私が従来から強調してきたように、中ソ関係はいまやきわめて順調に推移していることを改めて確認しなければならぬ。ゴルバチョフ書記長も「新疆ウイグル自治区とカザフ共和国を結ぶ鉄道の建設協力問題に前向きな回答を与える用意がある」と語っているが、モスクワ—北京間を最短距離で結ぶ「ユーラシア大陸縦貫鉄道」は、すでに着工されつつあり、中国側「大西北計画」へのソ連の協力をとりつけられていて、将来は、シベリア開発への中国人労働力の提供もあり得るようになる。

こうした状況下において、中国のいわゆる中ソ関係改善のための「三大障害」は、実際には、西側諸国を苛立たせないための鄧小平主任らの西側首脳へのプレゼントでしかなかったためであるが、中ソ関係の障害はこうして名実ともに除去されることになる。ベトナム情勢にかんしても、チュオン・チン新体制下で中越関係改善が日程にのぼりつつあることを忘れてはなるまい。

このような中ソ関係の改善を軸に、アジア社会主義圏の再編成がすすみ、相互依存と相互補充の関係が強まるであろうが、それは、今日の社会主義圏が、ソ連も中国も、その内政、とくに経済的脆弱性に直面しつつあるだけに、当然の成り行きだといえよう。とくにソ連は、ブレジネフ時代の世界戦略的軍事的拡大のコストに悩んでおり、ゴルバチョフ新外交の背景にも、そのことが見えている。

いまや社会主義諸国は、かつてのように威勢よく「内輪もめ」を

している余裕もなくなりつつあるのだから、この点を冷静に見きわめれば、中ソ和解が日本にとって安全保障上の脅威になるとは必ずしもいえないであろう。

そこで懸案の日ソ関係であるが、ゴルバチョフ書記長の演説では、「過去の問題にわずらわされない平静な雰囲気での深い協力を必要としている」となっていて、読み方次第でどのようにも解釈できるようになってきている。それにしても、ソ連は今日、日本の経済力にきわめて高い評価を与えているのであり、それは「日本人は経済外交という経済活性化の方法をもっていろいろだが、それはソ日協力に役立つであろう」との表現に端的にあらわれている。

このような日本認識をソ連側が示している以上、わが国はそれを全面的に受けて立つなかでしか、北方領土問題をはじめとする懸案の解決はあり得まい。

これまで日本側当局者は、ソ連は誰が指導者になっても体質的に変わらない、という保守的なソ連観に支えられ、ソ連脅威論の神話にとらわれてタカをくくっていた感がある。そのようなとき、ゴルバチョフ書記長の積極的な対日攻勢に出あっていささか泥縄式の対応を迫られつつあるのだが、日ソ関係の打開を米、中兩國の出力や米ソ関係の推移に依存するのではなく、いまこそ全力を傾注して対ソ外交の戦略とシナリオを真剣に構想すべきであろう。

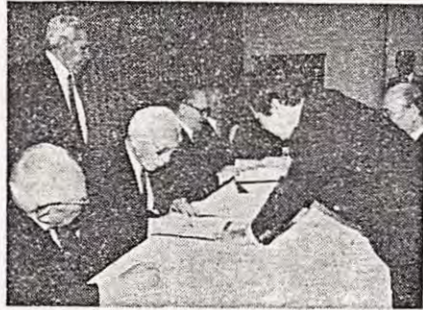
米・ソ両超大国をはじめ、多くの国々が肥大化した軍拡や軍事支出のコストに悩みつつあるだけに、わが国は、軽武装・経済主義という現実路線こそ、日本の発展を導いたのであるという自信をもって、正々堂々と真正面から日ソ関係の打開に努力し、アジアと世界の平和に積極的に貢献すべきだといえよう。

流動の八〇年代に！  
 勇氣ある提言と  
 マスコミ批判

本紙はマスコミの偏向報道は正のため、建設的で具体的提言を行い、激動する内外情勢に対し、自由かつ公正な論陣を展開しております。正しい判断の指針として、自信をもってお褒めいたします。

◆寄稿人懇話会・運営委員並びに同人◆  
 (運営委員) 飯塚洋吉 (運営委員) 金田雄次 加藤克  
 久賀健三 高坂正典 林 三郎 村松 暁  
 (同人) 阿川弘之 石川忠雄 渡山成英 渡藤周作 大平  
 博樹 加瀬繁 神谷正一 藤田晋太郎 久保田孝子  
 香山健一 小瀬桂一郎 佐藤昌彦 坂信彰 鈴木重信 志  
 水雄雄 白井信明 新堀通也 竹野 明 田久保忠衛 殿  
 岡昭郎 藤島泰輔 本間孝世 三好 修 武藤光朗 村松  
 明 深川英正 矢島初次 渡辺 一  
 (事務局) 三田四郎吉 (言論人主幹) 淺岡光正

タブロイド版4ページ  
 月3回発行1部150円  
 1年5,400円(送料含)  
 言論人懇話会(東京都中央区  
 銀座2-2-18 西欧ビル)  
 電(03-561-4311) 振替・東京  
 1-101047 (見本誌贈呈)



### 第五回・日ソ円卓会議 共同コミュニケ

一九八六年二月一日から三日まで、東京において日本対外文化協会、日ソ友好議員連盟(有志)、日ソ親善協会、日ソ交流協会および日ソ貿易協会とソ連対外友好文化交流団体連合会とソ日協会共催の第五回日ソ円卓会議が、友好と相互理解の雰囲気の中で開催された。

会議には、両国から、日本国会、ソ連の最高会議を代表する議員、社会・宗教団体の指導者と活動家、学者、教育家、ジャーナリスト、芸術家、経済人、出版人など各方面の人々約五百名が参集した。

国際平和年、並びに「日ソ共同宣言」にもとづく国交回復三〇周年に開催されたこの会議は「アジア・太平洋地域における平和と安全の強化をめざす日ソ兩國民の役割」をメインテーマとして、総会と分科会において、現在の国際情勢、アジア・太平洋地域の情勢、日ソ間の政治、経済、文化交流、日ソ友好の強化などの諸問題を多角的に協議した。

会議参加者は、ジュネーブでの米ソ首脳会議において「核戦争に勝者は無い」ことが確認され、米ソの核軍縮交渉が新たな段階にさしかかったこと、さらに、レイキャビクでの米ソ首脳会議を通じて、核軍縮問題についての原則的な合意が達成される可能性が示されたことを高く評価した。会議参加者は、また米ソ首脳会議が、人類の生存のために、力によって目的を高くすることが可能であるという、古い考えを捨て、平和的、互恵的、また文明の進歩を目指して継続されることを希望した。また、核軍拡競争の停止と、宇宙空間を平和目的にのみ利用するための国際的な世論を喚起させる必要があることが強調された。

会議のメイン・テーマであったアジアと太平洋地域での平和と安全に関して、会議参加者は、アジア・太平洋諸国の自覚ましい発展の結果、環太平洋地域のグローバルな関係に占める

# 自由

3月号

## 特集 第五回日ソ円卓会議全記録

日ソ関係の改善を期待する<基調報告>……櫻内義雄  
ソ日両国の世論の役割<基調報告>……A・E・ウォス  
〔国際情勢〕伏見康治、M・チタレンコ〔日ソ政治〕横山利秋、G・キム  
〔経済・漁業〕金森久雄、M・キセリヨフ、N・コフ〔教育・文化〕松前達郎、F・シティカロ  
〔友好運動〕村上義光、V・ザペーリン／現実主義外交と日本の立場…中嶋嶺雄

**防衛シリーズ 座談会(22)** 防衛費一%枠撤廃と今後の防衛政策  
三原朝雄、有馬元治、永野茂門、白川元春、矢田次夫、菊池武文  
円高、産業構造の転換に対応した雇用対策……廣見和夫  
マスコミ(秘)情報 円高風船、激動の政局、中国政変どこへ行く

